

NO,18

オオバヤシャブシ (カバノキ科)

3月中～下旬、他の木々に先がけて花をつけるのがこのオオバヤシャブシです。花といってもふつうイメージする花ではなく、雄花は4～5 cmの太くて弓形に垂れ下がった淡黄色の花です。この雄花は、遠くからでもよく目立ち、本格的な春の訪れを感じさせてくれます。雌花は雄花の上部につき、あまり目立ちません。実のなる果穂は、2～2.5 cmでやや斜めに1個つき、緑色をしています。冬ごろに枝先を観察してみると、今年熟した実と昨年熟し実を飛ばしきった黒っぽい実がついていることがわかります。この黒っぽい古い実は楕円形の美しい形をしており、よくリースの材料などに利用されます。冬に枝の先端に見られる花芽は、手で触ってみるとねばねばしているので、観察してみましょう。これは、トチノキの冬芽と同じように、粘液を出して冬の寒さから花芽を守っているのです。

オオバヤシャブシは関東地方南部から紀伊半島にかけて分布する高さ10mほどになる落葉高木で、もともと島根県には自生していない木です。造成地斜面の緑化によく利用されるため、道路わきなどでよく見られます。造成地などやせた土地でも旺盛に生育するのは、根が根粒菌と共生し窒素を固定し養分にするができるからです。のり面保護に使われる他、染料や薬用にも利用されます。

ヤシャブシの「ヤシャ」は、がさがさした感じの実（球果）が鬼神の顔に見たてて夜叉と呼ばれたものです。また、「ブシ」は実にタンニンを多く含むため、五倍子（ぶし）の名がつけられたといわれています。



▲ オオバヤシャブシの葉（表面）



▲ オオバヤシャブシの葉（裏面）



▲ オオバヤシャブシの実（左上の黒っぽいものが去年のもの、右下の緑のものが今年のもの）



▲ オオバヤシャブシの雄花（黄色く垂れたもの）と雌花（右前の突き出たもの）